

九州産業考古学会報

第24号 2016年1月15日発行 発行元：九州産業考古学会

産業考古学と世界遺産

山田元樹（大牟田市役所 市史編さん室長）

「産業考古学」を初めて明確に意識したのは、大学生の時、昭和57年のことだった。専攻未定の九州大学教養部時代、秀村選三先生の古文書のゼミに参加していた。先生に問われて「考古学を専攻する」旨お答えしたところ、「それならぜひ『産業考古学』をやりなさい」と勧められた。結果的に、一般的な研究対象である古墳時代の須恵器で卒論を書いた。須恵器窯業生産体制に主眼を置いたところに若干先生の薫陶を生かしたつもりであった。

昭和61年に大学を卒業すると大牟田市に文化財専門職として奉職することとなった。大牟田と言えば「三池炭鉱」である。

秀村先生のお言葉に従っておけばよかったかもと反省した。当時九州大学医学部助手をされていた田中良之先生（後に大学院比較社会文化専攻教授）からも「大牟田にはわが国最大の遺跡がある。それを後世に伝えられるかにお前の真価が問われる」と檄を飛ばされた。

実際赴任してみると、凄いものがあつた。明治の炭鉱施設が現役で働いており、明治の電気機関車が専用鉄道で貨車を引いていた。しかし、当時それらは文化財と見なされていなかった。

昭和63年に東京国立博物館で文化庁の研修を受けた時、これから「近代化遺産」というものに取り組むと聞き「これだ!」と思った。平成2年1月に文化庁予備調査を委嘱された清水慶一先生が大牟田来訪の際、ご指名は三井三池製作所だったが、平島勇夫先輩と謀って、様々な炭鉱施設にもお連れした。これを契機に様々な場面で先生のご指導を仰ぐことができた。

平成3～5年の福岡県近代化遺産総合調査を経て、三池炭鉱関連の施設群も文化財としての価値づけを得たが、一般に理解されるまでにはなお長い年数を要した。所有企業に文化財指定を打診すると露骨に嫌な顔をされた。市民の中には早くなくなってほしいという声もあった。

市民のコンセンサスが充分でない施策を進めるのにためらいも感じたが、未来市民からの負託を信じ、50年後100年後には必ず評価戴けると自らに言い聞かせて頑張った。転機はやはり平成9年3月の三池炭鉱閉山だった。閉山対策の中に近代化遺産保存対策も位置づけられた。時間に追われる中何とか調査書を取りまとめ宮原坑、万田坑は重要文化財（平成10年5月）・史跡（平成12年1月）の国指定に漕ぎ着けた。

もちろん失われたものも多い。閉山に先立ち発破解体された四山坑はその最たるものである。

それから幾星霜、昨年7月世界遺産に登録された。解体寸前でかろうじて命をつなぎとめた宮原坑に、観光バスで多くの人が見学に訪れる様子には、今昔の感を禁じ得ない。わが子にも等しい宮原坑の晴れ姿に往時の苦勞も報われる気がし、支援いただいた方々への感謝の念がこみ上げてくる。

【研究発表】

明治日本の産業革命遺産の世界遺産記載までの備忘録

—旧三池炭鉱における地域在住研究者の視点より—

永吉 守 (NPO 法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ理事、大学等非常勤講師)

1. はじめに

2015年7月5日、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」(以下、「明治日本の産業革命遺産」もしくは「本遺産」と省略)がドイツ・ボンで開催された第39回世界遺産委員会にてユネスコ世界文化遺産に記載(いわゆる「登録」、以下通俗的な「登録」の文言を使用)が決定した。紙幅の都合上、詳細は割愛するが、8県11市23の構成資産からなる本遺産は、幕末から明治までの日本の重工業の世界史的に見ても類例のない急速な近代化を端的に示すものである。

本稿は、事情を知る九州産業考古学会の多くの会員各位にはあまりにも既知で退屈なものになるかもしれないが、本遺産が世界遺産として登録されるまで、とりわけ複数の三池炭鉱の施設について、筆者および筆者がメンバーとなっている「NPO 法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ」(以下、「ファンクラブ」と略)の関与について、また、世界遺産記載前後における人文社会科学的視点からのいくつかの危惧について記しておきたい。

2. 世界遺産構想の嚆矢と展開

本遺産登録においては、何にも増して、都市経済評論家である加藤康子氏(現:内閣官房参与)の功績によるところが大である。加藤氏は、世界各地で鉱工業を中心とした産業遺産の保存・活用に関心を示し、1999年に『産業遺産』を著す。ほどなくして、加藤氏の著した『産業遺産』は鹿児島島の尚古集成館等運営している島津興業の島津公保

氏(当時社長、現副会長)の目にとまり、島津氏と加藤氏による(主に集成館の)世界遺産構想が構築されたのがその嚆矢であると推察される。その後、加藤氏は産業遺産に関する師と仰ぐ TICCIH 事務局長(当時)スチュアート・スミス氏らと協力しながら、これを集成館のみならず、九州・山口を中心とした近代化産業遺産群のシリアル・ノミネーションとして世界遺産登録することを志向し、2003年に国際鉱山ヒストリー会議赤平大会、2005年に産業観光国際フォーラム・TICCIH 中間会議 2005 in 愛知・名古屋(以下「TICCIH 中間会議 in 名古屋」と略)と次々と国際会議を誘致し、TICCIH 会員を含む多くの国際的に活躍する産業遺産研究者や各国 ICOMOS 委員などに本遺産の魅力をアピールしていった。

3. 三池炭鉱関連資産の世界遺産記載への動き

筆者は、2001年の結成以来ファンクラブの中心メンバーであり、長崎の産業遺産保存活用団体のひとつである「軍艦島を世界遺産にする会」の坂本道徳氏らと親交があった。2003年になり、坂本氏らが「軍艦島フォーラム 2003 夏」が7月に開催され、筆者が登壇者として参加した際に、同じ登壇者として加藤氏と初見し、シンポジウムや懇親会で世界遺産構想を彼女から聞いたのが筆者およびファンクラブの世界遺産登録活動へのきっかけであり、後に九州伝承遺産ネットワーク結成へとつながった。同時に、彼女が国際鉱山ヒストリー会議の誘致者であることも判明し、その年の10月には

国際鉱山ヒストリー会議が開催され、筆者は三池炭鉱関連の産業遺産と保存活用団体であるファンクラブの活動展望を紹介した。

2005年、筆者はTICCIH中間会議 in 名古屋にて三池炭鉱に関する産業遺産の保存と活用をテーマにし、ウォーキングイベントなど具体的な保存活用活動の実績を示した。同時に、三池炭鉱に関する遺産群も含めて世界遺産として登録するという加藤氏の構想に同調し、名古屋会議の直後にスチュアート・スミス氏と加藤氏を大牟田・荒尾に招き、視察のうへで世界遺産の可能性をスミス氏と加藤氏より古賀道雄大牟田市長(当時)にプレゼンテーションの上、それを大牟田で開催の「九州産炭地フォーラム」という形で広げた。さらに、この直後、加藤氏らによって鹿児島にて「九州近代化産業遺産シンポジウム in 鹿児島」が開催され、「かごしま宣言」という形で複数の行政としても本遺産のコンセプトの骨子となるような取り組みが提言された。そしてこの「かごしま宣言」は翌年、九州地方知事会のとりくみとして世界遺産登録へと具体化することになったのである。その後、筆者は本遺産の構成資産候補と目される場所の行政等によるシンポジウム等に複数回登壇することになった。2006年11月、この年から開始された文化庁による世界遺産暫定リスト候補の国内公募に九州地方知事会をベースとした6県8市(山口県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県、萩市、北九州市、唐津市、長崎市、大牟田市、荒尾市、宇城市、鹿児島市)で提案するも暫定リスト入りは継続審議となり、2007年12月、6県11市(前述の6県8市に加え、下関市、飯塚市、田川市)で提案し、2008年に文化庁および政府の承認を得、2009年1月にユネスコ世界遺産暫定リストに掲載されることになる。

4. 暫定一覧表記載以降—三池炭鉱関連遺産の場合—

上記のような過程を経ながらの課題として、三池炭鉱関連遺産においては、筆者およびファンクラブは、当初構成資産ではなかった三池港と三池炭鉱専用鉄道敷(三池鉄道敷)も海外専門家からの評価が高く、また世界遺産構成資産として歴史的にも遺産の保存状況からもふさわしいと提言してきた。一方で、三井鉱山(当時、現日本コークス工業)所有のそれらの場所は、三池港に関しては三井鉱山で利用しているので遺産化に難色が示され、鉄道敷に関しては三井鉱山が大牟田市に無償譲渡をもちかけるも市が断念するという状況であった。そこで、ファンクラブでは、暫定リスト掲載前の2008年、熊本大学や福岡大学の土木・建築・都市計画系のゼミと連携しながらトヨタ財団地域社会プログラムの助成を受けて三池港と三池炭鉱専用鉄道敷を世界遺産の構成資産にすることを重点においた、「炭都の風景を切り撮る」という写真ワークショップとシンポジウムを開催し、さらに、加藤氏も指摘し続けていた事項として、三池港が稼働資産であるために文化庁主導のこれまでの世界遺産登録では稼働資産が構成資産とならなかった点を政策課題としてとりあげるよう、当時の政府(鳩山・菅内閣)に働きかける文書を筆者が地域の識者、あるいは産業考古学会会員として送付するなどの活動を続けてきた。2009年10月、「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会第4回専門家委員会とそれに続く世界遺産シンポジウムにおいて、田川など筑豊の遺産が本遺産から除外され(後に山本作兵衛炭鉱記録画の「ユネスコ世界の記憶」記載運動になっていく)、その後、稼働資産に関する世界遺産記載への政府での検

討が進められる中、2010年、三池炭鉱の遺産においては、荒尾市・熊本県・文化庁による万田坑施設の重要文化財部分の修復、および万田坑史跡周辺の修景が実施された。

5. 遺された課題

しかしながら、2010年の万田坑に関するこれらの修復・修景は、これまでの文化庁が他の近世までの文化遺産で採用されていた復元手法、また耐震補強、および観光客への利便性を含むものであったため、産業遺産、それも世界遺産の産業遺産では重要視される産業の機能や改修痕跡を最低限度の介入で修繕する、というような手法ではなく、かつての稼働状況を考えると耐震補強のブレース（筋交い）が動きの邪魔をしているなどの問題が露呈したものとなった。

また、2009年1月のユネスコ世界遺産暫定リスト掲載以来、世界遺産正式記載へと動きが加速して行く中、とりわけ2012年に以降顕著に筆者が感じていたことがある。それは、世界遺産記載への政府・地方行政および加藤氏や海外専門家らを含めた人々の動きが、少なくとも筆者個人の世界遺産に対する考えや各地の市民活動と乖離しつつあったことである。当然ながら、世界遺産記載は世界遺産条約に則って政府レベルで進める形式であり、また稼働資産等においては所有者との協議が不可欠であろうことは容易に想像できるので、筆者のような市井の研究者（および民間市民団体の一メンバー）に対して国家を含む行政や専門家から積極的に情報が開示されることは期待できない。しかしながら、筆者はこの頃から世界遺産への記載をへて現在までに少しずつ疑問を抱きはじめていたことも事実である。本論では、その中の三つ(a. ~c.)をつまびらかにしたい。

a. 日本の近代化に伴う「陰の側面」が強調されなかった点である。本遺産の「産業革命」（もしくは「近代化」）というのは、「19世紀後半から20世紀の初頭にかけて、日本は工業立国の土台を構築し、後に日本の基幹産業となる造船、製鉄・製鋼、石炭と重工業において急速な産業化を成し遂げた」（明治日本の産業革命遺産・加藤康子 ウェブサイト）ことであり、その中心は、幕末から明治における被植民地化防止のために軍事力や経済力を必要とし、そのための欧米技術の導入とトライ・アンド・エラーの末、急速に重工業が発展したことだと解釈されていることが多い。その点に疑問をさしはさむ余地はないが、それでは、その結果として軍備拡張を繰り返し、最終的に第二次世界大戦の敗戦に至った、ということが隠されてしまったように見受けられる。むしろ、1904年の日露戦争の勝利によって1910年の日英博覧会で産業革命や近代化の達成を英国で誇示し、「明治」という時代が1912年で終了する、というようなことでの区切りはある。しかしながら、やはり、急速な近代化の結果として、国内外の様々な人々を抑圧したことを考慮に入れるべきであったと考える。

b. 本登録前後に顕著になってきたことだが、「観光」への過剰な期待とその圧力である。世界遺産記載以前に、三池港に付随する旧長崎税関三池税関支署は大牟田市が所有者となったうえで修復されたが、これは社寺の復元的手法を使い多額の資金を投入する手法であり、外観上は使用痕跡よりも復元が優先されたものとなった。保存されることは大変喜ばしいが、産業遺産の保存においては使用痕跡を残し最低限度の介入による修復が最善だと考える筆者にとっては、観光の側面を意識した復元に思えてな

らない。また、万田坑の整備においても、前掲した修景の一環で周辺の社宅跡を公園化し、万田坑の有料公開施設として「万田坑ステーション」を建設するなど、産業遺産そのものの価値よりも、観光目的による集客を狙うといったような開発が散見される。同様に、宮原坑においても、宮原坑および三池炭鉱鉄道敷に近い三井化学社宅アパートが解体され、大牟田市が取得して宮原坑の駐車場となり、世界遺産登録直後に篤志家による「炭鉱電車型トイレ」が寄贈・設置されており、善意によるもの、また見学者への利便性という名目であるが、あからさまな観光化に眉をひそめるものである。

c. 三池炭鉱の関連施設で世界遺産構成資産からは漏れた場所、あるいは炭鉱とは直接関係しないが大牟田・荒尾における産業遺産の解体が進行していることである。2009年以降においても、三池港付近の三池炭鉱専用鉄道敷の一部を含むトンネル式貯炭施設(この施設がダン・クロ・ローダーと併せて石炭船載の要であった)と旧三川電鉄変電所脇トンネル(前述貯炭施設につながる鉄道敷の一部)が有明海沿岸道路の建設に伴い解体され、前述のとおり三井化学の鉄筋コンクリートアパートも解体され、宮原坑駐車場となった。また、三川坑は大牟田市により保存計画が策定されたが、その計画は、現存する坑口関係の機械を保護するという目的で、現存する建屋を修復せずに、建屋を一旦解体して再建するという方向性を示している。さらに、近世期の干拓地で、かつては三井鉱山が設置・管理し、後に大牟田市による管理運営となっていた炭鉱関連地の低湿地における排水のため、「ゐのくち式ポンプ」が設置されている「小川開ポンプ場」は別途新設ポンプ場設置に伴い、近く解体される可能性が高い。

以上のような懸念を抱えつつも、今後とも産業遺産を地域社会の文化ととらえ、遺産の保存とある種の学習型観光を含む活用のバランスを今後も考え続けていきたい。

<参考文献>

- ・加藤康子 1999 『産業遺産－「地域と市民の歴史」への旅－』日本経済新聞社
- ・木村至聖 2014 『産業遺産の記憶と表象－「軍艦島」をめぐるポリテクス－』京都大学学術出版会
- ・永吉守 2009 『近代化産業遺産の保存・活用実践とその考察－NPO 法人大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブの事例より－』(西南学院大学博士論文、印刷公表版)
- ・<九州山口の近代化産業遺産群>世界遺産登録推進協議会(ウェブサイト)「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」<http://www.kyuyama.jp/> (2015年12月25日閲覧)
- ・明治日本の産業革命遺産・加藤康子(ウェブサイト)「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」<http://www.japansmeijiindustrialrevolution.com/> (2015年12月25日閲覧)
- ・ICOMOS 2011(ウェブサイト)
“Joint ICOMOS TICCIH Principles for the Conservation of Industrial Heritage Sites, Structures, Areas and Landscapes <<The Dublin Principles>>”
http://www.icomos.org/Paris2011/GA2011_ICOMOS_TICCIH_joint_principles_EN_FR_final_20120110.pdf (2015年12月25日閲覧)
- (日本語訳：
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/sangyouisan/yuushikisya/kadouisan01/unbaru.pdf>)

【書籍紹介】

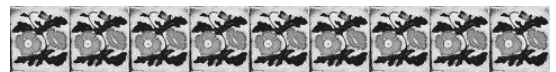
田中滋幸著『九州の百年企業』
木元富夫（顧問）

辞典によれば産業の第一義は、「世渡りの仕事。なりわい。」とある。そうであれば産業の原初の形態は、今に続く地場産業や中小企業に求められる。そしてその長い歴史の中に産業人の誇りや貴重な産業遺産が形成されている。本書は産業の原点たる九州各地の地場企業それも百年を越える老舗を訪ねて、トップからの聞き取りによって「経営の知恵」を探ったものである。取り上げられた企業を、情報提供ということでここで紹介すると、福岡県の平助筆復古堂・長尾製麺・福新楼・天天堂・福岡金文堂・シャボン玉石けん・原三信病院・志岐蒲鉾本店・石村萬盛堂・平田産業・浜地酒造・花キク・久原本家・藤井養蜂場・西村織物、大分県のフンドーキン醤油・亀の井別荘、佐賀県の北島・佐賀玉屋・森光商店・ウサイエン製菓、熊本県のリバテープ製菓、以上22社で、中には創始500年を越えるところもある。

老舗企業が長寿を保ちうるには、経営者が仕事を愛し、従業員を愛し、郷土を愛することが基底になればなるまい（「人を愛し国を愛し勤めを愛す」と言ったのは佐賀出身の実業家、市村清であったが）。本書に出てくる百年企業はまさに然りであり、その多くが地域貢献を念頭に、旧来の設備や機械を大切に使っている様子がしのばれる。社屋そのものが貴重で、社内に資料室を設けているところもあるようで、ここに百年企業が産業考古学の対象となる所以がある。その方面の情報が本書に手薄なのは残念だが、それこそ我々産業考古学徒の出番と言うべきだろう。小会の見学会は鉄やら石炭

やら港湾やら大物がらみが多いが、本書に出てくるような「小産業」を歴史的に見直すことも意味深いと思われたことであった。

それともう1冊、弓削信夫『明治・大正・昭和 九州の鉄道おもしろ史』（西日本新聞社、2014年、1700円）を紹介したい。本書は、九州最古参の鉄道記者OBが、これまでの蘊蓄を集大成したもので、便利で読みやすい本に仕上がっている。鉄道で小旅行に行くときは、本書をのぞいてから出かけよう。（海鳥社、2015年、本体1700円）



【お知らせ】

産業考古学会創立40周年記念「近代化遺産」シリーズ講演会・シンポジウム

岡山を会場に産業考古学会創立40周年記念事業の講演会を開催しています。みなさまのご参加をお待ちしています。

主催：産業考古学会、岡山近代化遺産研究会

共催：岡山シティミュージアム、就実大学史学会、吉備国際大学

会場：岡山シティミュージアム講義室（岡山市北区駅元町15-1リットシティビル4階（JR岡山駅中央改札口から徒歩約3分））

期日：2016年3月12日（土）14:00～18:00

基調講演：「明治日本の産業革命遺産、製鉄・製鋼、造船、石炭産業」北九州市門司麦酒煉瓦館館長・産業考古学会理事 市原猛志

シンポジウム：近代化遺産の文化的価値と保存・活用
コーディネーター：伊東孝氏
パネリスト：種田明氏、中田健一氏、大島登志彦氏、市原猛志氏

入場料：無料、当日先着80名、全席自由
（本企画は公益財団法人福武教育文化振興財団の助成を受けています）

【お知らせ】

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」関連情報

各自治体がそれぞれに分散して情報発信しており、なかなか全容がつかみにくい「明治日本の産業革命遺産」に関して、事務局で把握している情報を列記する。

・北九州エリア

(1)官営八幡製鐵所関連施設バスツアー

バスで製鐵所の構内に入場し、旧本事務所の建物内部を見学できます(旧鍛冶工場と修繕工場は車窓から)。

期日：2016年1月16日(土)・23日(土)・30日(土)の各11時10分、13時30分(所要時間各1時間20分)。

費用：2300円(4歳～小学生1500円)

申込み：JTB九州(TEL:092-751-2102)・予約は実施日の10日前まで)。

(2)KIGS ツアー世界遺産登録記念 三井炭鉱万田坑と三重津海軍所跡と柳川御花

期日：2016年1月30日(土)。日帰り、昼食付き。料金、費用 3800円。

コース：北九州イノベーションギャラリー(発・着)～三池炭鉱万田坑～料亭御花(昼食)～佐野常民記念館・三重津海軍所跡

問合せ：北九州市交通局旅行センター(TEL:093-562-6900)

・大牟田エリア

(3)大牟田・荒尾の世界文化遺産を巡る無料シャトルバスを運行中!(ボランティアガイド同乗)

期日：1月9日～2月28日の土・日、祝日
10:00～15:00の時間帯で各1時間に1本
巡回ポイント：

a. 大牟田駅～大牟田市石炭産業科学館～宮原坑～大牟田駅を巡回

b. 大牟田駅～万田坑～三池港～旧三井港倶楽部～大牟田駅を巡回

問合せ：大牟田市商業観光課(TEL:0944-41-2750)

・萩エリア

(4)萩・世界遺産ビジターセンター学び舎(まなびーや)開館

開館日：2016年1月30日

場所：山口県萩市江向602(旧明倫小学校体育館/「花燃ゆ」大河ドラマ館)

問合せ：(公社)萩市観光協会(TEL:0838-25-1750)まで。

・佐賀エリア

(5)世界遺産シンポジウム(仮)

期日：2016年2月27日(土)13:00～

場所：佐賀大学大講義室(佐賀市本庄町1)

主催：(一財)産業遺産国民会議、NPOまちづくり研究所

問合せ：NPOまちづくり研究所(TEL:050-3448-6155)まで



写真 長崎・小菅修船場の蒸気機関

◇◇会報原稿募集（会員外でも応募できます！）◇◇

『九州産業考古学会報』への積極的な投稿をお願いします。募集原稿は【報告】（700字～1400字程度）や【研究発表】（1400～2800字程度）、【お知らせ】（400字以内）など。いずれも図表を入れる場合文字数要調整。また紙面の都合上、文面レイアウトに関して編集側で変更する場合があります。投稿に関する詳しい情報は学会ウェブサイト及び事務局まで。

■■会報第24号・目次■■

【巻頭言】

産業考古学と世界遺産……………山田元樹 1

【書籍紹介】

田中滋幸著『九州の百年企業』
……………木元富夫 6

【研究発表】

明治日本の産業革命遺産の世界遺産記載までの備忘録—旧三池炭鉱における地域在住研究者の視点より—
……………永吉守 2

【お知らせ】

産業考古学会創立40周年記念「近代化遺産」シリーズ講演会・シンポジウム… 6
「明治日本の産業革命遺産」関連情報… 7
今後の予定…………… 8
会費納入・ご寄付のお願い…………… 8

今後の予定		会費納入・ご寄付のお願い
2月 27日	九州伝承遺産ネットワーク シンポジウム(佐賀市)	当会は年会費を個人会員2000円、団体会員は5000円それぞれ徴収しています。当会の趣旨をご理解頂き、会費納入或いはご寄付の程、どうぞ宜しくお願い申し上げます。 会費納入・寄付先口座（一覧） ・ゆうちょ銀行 17430-88882241 キュウシュウサンギョウコウコガツカイ ・福岡銀行大牟田支店（店番691） 普通 1914369 九州産業考古学会
3月 6日	旧サッポロビール醸造棟公開(門司赤煉瓦プレイス)	
3月 12日	産業考古学シンポジウム (岡山シティミュージアム)	
4月		
5月 21・22	産業考古学会年次総会 (横浜みなと博物館)	
	会報25号発行	

<編集後記>

九州各地の情報を募る、と言ってはいるものの、伝わる情報にはインターネットに頼るところが大きい。SNSの普及に伴ってその割合は日々大きくなる一方である。地域に密着した学会でありたいと思いながら、今回世界遺産関連情報を記載した。速報性の高いものはウェブサイトへの転載も行いますので、会員の有無にかかわらず情報提供のほど、よろしく願いいたします。（市原）

九州産業考古学会事務局 〒811-3430 福岡県宗像市平井二丁目12-1 砂場一明 気付
TEL&FAX: 0940-36-5501 E-mail: k-sunaba@jcom.home.ne.jp URL: http://kias.kilo.jp/index.php
学会ML希望者は、上記アドレスもしくはWeb担当者(iota_titanus@yahoo.co.jp)まで連絡願います。